

国府台学会経済研究会（第124回）

イギリス産業革命と織物業
—手織工の経営形態—

大 賀 紀代子

研究会開催日：平成27年6月15日

（報告要旨）

本報告では、イギリス産業革命期において伝統的な技能を用いて生産を行う「手織工」と呼ばれる職業に関し、その経営形態についての考察結果を述べるとともに、今までの自身の研究について紹介した。

従来、経済史において、イギリス産業革命の綿業に関する考察は、近代的な工場で機械を用いた生産を対象とし展開されてきた。そのため、伝統的な技能を用いた手織工についてはあまり多くことが明らかとされていない。

そこで、産業革命期イングランド木綿織物業の経営形態に対して、

- ①「1841年人口センサス個票」
- ②「手織工に関する王立委員会報告書1839年－1841年」（「英国議会資料」）
- ③「アートと製造業に関する特別調査委員会報告書」（「英国議会資料」）
- ④「手織工団体の規約」

の4種類の資料の分析を行おこなってきた。

そして、ランカシャー州プレストンにおける産業革命終期の手織工の実態を、「手織物工場 handloom factory」という経営形態に焦点をあて考察を行ってきた。

その結果、以下の7点を明らかにするに至っている。

- ①ランカシャー州プレストンにおいて、「手織物工場」が多数存在していた。

そして、「1841年人口センサス個票」より、プレストンには多くの手織工が「手織物工場」で働いていた。

②この「手織物工場」では機械と同じ建物で手織機を用いた生産が行われていた。この「手織物工場」は、工場監督官の指示の下、手織工は決められた時間仕事に従事するという仕組みであった。

③「手織物工場」はプレストンの政治家であったホロックス家によって所有されていた。ホロックス家は綿業の発展を後押ししていた。

④「手織物工場」では、高い技能を必要とするデザイン性の高い商品・高級品が生産されていた。つまり高い付加価値をもつ商品を生産していたといえる。そのため、技能が高い手織工が多く、賃金も問屋制下で働く手織工よりも高かった。

⑤この高い技能は、1813年以降に作られた「新しい徒弟制」によって修得され、1840年前後においては学校においても教えられていた。プレストンにおいては、ホロックス家によって学校が建設された。

⑥1840年前後においても、「製造業者が手織工に仕事を委託するシステム」が存在し、このシステムでは製造業者と手織工の間に中間業者が介在する場合があった。

このシステムでは、仕事を委託された手織工による原材料・用具・出来上がった商品等の不当な着服・横領が発生していた。この問題を防ぐために政府はさらなる法整備を検討していた。

⑦「手織物工場」では、経営者が直接自らの生産設備の下で手織工に勤務させるため、「仕事を委託された手織工による原材料・用具・出来上がった商品等の不当な着服・横領」のような問題の発生を防止することができた。

「業務委託システム」では、生産の効率性や正確性にも問題が出てくるが、「手織物工場」はこの点についても効率的に行うことが可能であり、それが「問屋制下での小さな仕事場・家内工業」から「手織物工場の拡大・発展」へと変化するインセンティブになったのではないかと考えられる。

このような考察結果より、「手織物工場」というものは、「問屋制下での小さな仕事場・家内工業」から「動力機械による生産を主とする近代的工場生産」への移行期にあらわれた生産形態・経営形態であると考えている。そして、この「手織物工場」という生産形態・経営形態の存在は、産業革命期の綿業において「伝統的な生産様式」と「動力機械を用いた生産」が併存してことを示していると思われる。

そして、以上の結果に対し、今後、主に以下の2点からの考察を進めていきたい。

①「手織物工場」から「近代工業」への移行がいかに進んでいったか、という点である。

「資本」の点からアプローチを行うことで、「手織物工場」は資本を入手する基礎的な条件を生み出したのではという観点からの考察である。

②「問屋制下での小さな仕事場・家内工業」から「手織物工場」への移行過程がどのようなものであったかを明らかにすることである。具体的な工場を例にあげ、工場の実態を追及したい。また、「手織物工場」と深い関わりをもっていたホロックス家について、プレストンの地域経済の発展とどのように関わっていたのかをより追及することで、プレストンの手織業がどのような構造となっており、どのように組織化していったのか、についても明らかにしていく予定である。

「手織物工場」という経営形態が、「問屋制下での小さな仕事場・家内工業」と、そして「動力機械を用いた生産を行う近代工場」と、どのような点が類似し、またどのように相違するのか、をより深く追求していくことで、近代資本主義の萌芽の実態を明確にしていきたい。そして、「伝統的な生産様式」と「動力機械を用いた生産」の併存が産業革命期の経済的変化に果たした役割をより深く追求していきたい。

本報告では、多くの先生方からたくさんの貴重なご意見を賜りました。今まで気づくこともなかった視点からのアプローチを提唱してくださり、強く今後の研究の励みになりました。心より感謝しております。

(2015.7.20 受稿, 2015.9.9 受理)